

マルコの福音書11:1-11 終わりの始まり

今日はマルコの福音書の学びにおいて重要な日です。今日からイエスの生涯における最後の1週間について記述された箇所を見ていきます。もちろん、マルコの福音書全体をみると、まだ2/3しか読んでいないことが分かります。まだ残りが6章もあります。マルコはこの最後の1週間の記述に異なる時期に起こったいくつかの出来事を付け加えた可能性はありますが、2017年、2018年にヨハネの福音書を読み進めた際、ヨハネの福音書のおよそ半分がイエスの生涯における最後の1週間に関する記述であったことを思うと、この長さも納得がいくのではないのでしょうか。今日は特にマルコの11:1-11から、イエスがエルサレムに入るという最後の1週間の始まりとなる出来事を見ていきたいと思えます。これは伝統的に棕櫚の日曜日として知られています。そしてこの出来事はすべて予言を成就するものであり、イエスが旧約聖書の予言を成就するメシアであるという事実に注目を集めるためのものです。この出来事には私たちにとっても実践的真理があるのですが、それはこの出来事が終わってからでなくては見ることはできませんので、まずはマルコの福音書11章の1節から6節までを読みましょう。

「さて、一行がエルサレムに近づき、オリーブ山のふもとのベテパゲとベタニアに来たとき、イエスはこう言って二人の弟子を遣わされた。2 「向こうの村へ行きなさい。村に入るとすぐ、まだだれも乗ったことのない子ろばが、つながれているのに気がつくでしょう。それをほどこいて、引いて来なさい。3 もしだれかが、『なぜそんなことをするのか』と言ったら、『主がお入り用なのです。すぐに、またここにお返しします』と言いなさい。」4 弟子たちは出かけて行き、表通りにある家の戸口に、子ろばがつながれているのを見つけたので、それをほどこいた。5 すると、そこに立っていた何人かが言った。「子ろばをほどこいたりして、どうするのか。」6 弟子たちが、イエスの言われたとおりに話すと、彼らは許してくれた。」

予言が成就されることを示す最初のしるしは、1節でオリーブ山が言及されていることです。オリーブ山は旧約聖書の時代から常にメシアの到来と結び付けられていたので、マルコがここでそこに言及していることは重要です。また、ここで起こっていることのも中心はメシアについての予言の成就です。最初は分かりずらいかもしれませんが、子ろばについてこれほどまでに注目している理由がそこにあります。マタイの福音書でこれが子ろばであることが分かりますが、もちろん多くの人にはイエスがろばに乗られたことを知っています。通常、私たちも棕櫚の日曜日というろばに乗ってエルサレムに入られたことを思い浮かべます。ですが、聖霊の靈感のもと福音書を書いたマルコは、実際にエルサレムに入られたことよりも、どのように子ろばを手に入れたかの描写に多くを費やしています。それは、この出来事がなぜそれほど重要なのかを理解するうえで、ろばが極めて重要だからです。それを知るためには、旧約聖書のゼカリヤ書9章を見る必要があります。そこに、この子ろばを手に入れることの詳細を理解する鍵があります。ゼカリヤ書9章で、神は預言者ゼカリヤを通してマケドニアのアレキサンダー大王の征服を預言されました。アレキサンダー大王はやがてペルシャ王ダレイオスを倒し、紀元前334年にペルシャ帝国を滅ぼすこととなります。そして、ペルシャ帝国征服の一環として、神の民に敵対していた都市や民族に対し、神の裁きが下されることとなります。アレキサンダー大王の軍隊によって滅ぼされることになったのは、ツロ、シドン、アシュケロン、ガザ、エクロン、ペリシテ人などです。ですが、神がゼカリヤを通して語られた重要な点は8節にある通り、エルサレムが滅ぼされることなく、迫りくる軍隊から逃れることを約束された点です。神はゼカリヤ書9:8でこのように言われています。「8 わたしは、わたしの家のために、行き来する者の見張りとして衛所に立つ。もはや、虐げる者はそこを通らない。今わたしがこの目で見ているからだ。」この出来事は聖書には記されていませんが、ユダヤの歴史資料によれば、アレキサンダーとその軍隊がエルサレムにやってきたものの、エルサレムに対して進軍し破壊するのではなく、神がアレキサンダー大王に与えた夢のためにエルサレムに手を伸ばさなかったというのです。これが本当かどうかは定かではありませんが、いずれにしてもエルサレムは神の預言通り守られました。そしてその預言に基づいて、マルコ11章に直接関係している9節に入ります。ゼカリヤ9:9-11を読みましょう。

「娘シオンよ、大いに喜べ。娘エルサレムよ、喜び叫べ。見よ、あなたの王があなたのところに来る。義なる者で、勝利を得、柔和な者で、ろばに乗って。雌ろばの子である、ろばに乗って。

10 わたしは戦車をエフライムから、軍馬をエルサレムから絶えさせる。戦いの弓も絶たれる。彼は諸国の民に平和を告げ、その支配は海から海へ、大河から地の果てに至る。11 あなたについても、あなたとの契約の血のゆえに、わたしはあなたの捕らわれ人を、水のない穴から解き放つ。」

ゼカリヤは神の民であるイスラエルの救いと結び付け、アレキサンダーのように彼らを滅ぼそうとするのではなく、救いをもたらす真の王が来られることを預言しています。滅びから彼らを救う救い主についての理解は、その王であり救い主の影響が及ぶ範囲は、イスラエルの民にとどまらず大きなものであるということです。全地がその支配の下にあるにも関わらず、その方は子ろばに乗ってエルサレムの町に入られる。この出来事が王の入城のしるしとなるのです。ですが、この預言に含めることが重要なので、11節に注目してください。与えられる救いは契約の血ゆえにもたらされるのです。エルサレムにろばに乗って来られるメシヤでおられる王についての預言にさえ、自由と救いをもたらすことと血を流す犠牲との関係があるのです。つまり、メシヤがもたらす王国は全地に広がりますが、その王国とそれがもたらす救いを可能にするためには、血が流されなくてはならないということです。ユダヤの人々はゼカリヤ書のこの聖句が預言的であり、メシアについて語っていることを認識していました。イエスを都に迎え入れるために集まった人々の頭の中には、そのようなイメージがあったのでしょうか。ですが、イエスがそれについて明確に預言し、旧約聖書そのものが血が流されることの必要性を明確に示していたにも関わらず、人々はこのことをイエスの王国を可能にする犠牲と結び付けてはおりませんでした。新約聖書のヘブル人への手紙の著者はこのことを認めています。ヘブル人への手紙9:22「律法によれば、ほとんどすべてのものは血によってきよめられます。血を流すことがなければ、罪の赦しはありません。」また、犠牲とメシアと子ろばを結び付けているのはゼカリヤ書だけではありません。重要なメシアに関する箇所のもう一つは創世記49章です。ここではヤコブの4番目の息子ユダについて述べられておりますが、彼はダビデ王の直系の先祖であり、したがってイエス・キリストの祖先でもあります。創世記49:10-11にはこうあります。「王権はユダを離れず、王笏はその足の間を離れない。ついには彼がシロに来て、諸国の民は彼に従う。11 彼は自分のろばをぶどうの木に、雌ろばの子を良いぶどうの木につなぐ。彼は自分の衣をぶどう酒で、衣服をぶどうの汁で洗う。」ここでもユダの血筋から生まれる王と子ろば、そして血による洗いや清めが結び付けられています。もちろんこれは詩的な預言の言葉ではありますが、そのつながりは偶然ではありえません。

救い主の犠牲なくして救いはなく、それは預言では、旧約聖書の最も古い時から子ろばに乗ってやってくる王と結び付けられていました。ですから、イエスがゼカリヤ書と創世記の預言を成就するために子ろばを手配したことは、イエスとその救い主、彼らのメシアであることを示す非常に重要なことなのです。そして、イエスが子ろばに乗られた姿はまさにゼカリヤ書に記されていることでした。7-10節を読みましょう。「7 それで、子ろばをイエスのところに引いて行き、自分たちの上着をその上に掛けた。イエスはそれに乗られた。8 すると、多くの人たちが自分たちの上着を道に敷き、ほかの人たちは葉の付いた枝を野から切って来て敷いた。9 そして、前に行く人たちも、後に続く人たちも叫んだ「ホサナ。祝福あれ、主の御名によって来られる方に。10 祝福あれ、われらの父ダビデの、来たるべき国に。ホサナ、いと高き所に。」」イエスに従っていった群衆は、イエスをメシアと認める賛美としか思えない言葉をもって、エルサレムの町にイエスを迎え入れました。私たちはホサナという言葉は単なる賛美の叫びのようなものか何かのように思っていますが、「ホサナ」という言葉はもっと具体的なものです。「ホサナ」という言葉はヘブライ語から来た言葉で、文字通り「私たちを救ってください、救い出してください」という意味です。人々はイエスの内に自分たちを救う能力があることを認めていましたが、後に分かるように、その救いを犠牲と結び付けてはおりませんでした。詩篇118:25はホサナという言葉のもととなることばで始まりますが、人々の言葉は詩篇118:25-27のメシアに関する部分から来たものです。「ああ主よ どうか救ってください。ああ主よ どうか栄えさせてください。26 祝福あれ 主の御名によって来られる方に。私たちは主の家からあなたがたを祝福する。27 主

こそ神。主は私たちに光を与えられた。枝をもって 祭りの行列を組め。祭壇の角のところまで。」

つまり、この出来事について明確なのは、人々がメシアを待ち望んでいたこと、そしてイエスをそのメシアと認識していたことです。では何がおかしくなっていたのでしょうか。この出来事が一週間後にイエスが十字架に釘付けにされる出来事と一致するのでしょうか。まず、イエスを歓迎するために集まった人々と、一週間後にイエスを十字架につけると叫んだ人々とが同じであるとは限らないということに注意すべきです。そうした詳細は聖書からは明らかではありませんし、ここにいる人々と「十字架につけろ」と叫んだ人々が同じだとすることが当たり前に見えるかも知れませんが、必ずしも同じであるとは言えません。その事実を認識しつつも、この個所が終わりに近づくとつれ、群衆がいかに気まぐれであったかを示す手がかりを見ることができます。直後に起こったことを見ると、イエスが預言を成就するメシアであることは明らかだったものの、人々が間違っと思いついて描いていたタイプのメシアであることは公に否定されます。群衆はイエスが乗っておられた子ろばを見て彼をメシアだと認識しましたが、旧約聖書が子ろばと血の犠牲を結び付けていることを見逃していました。ですが、子ろばに乗って王としてエルサレムに入られることではなく、それこそがイエスがメシアであることの核心でした。群衆はすぐに散り散りになったようで、イエスがローマに対して革命を起こすためにこの町に来たわけではないことを理解すると離れていきました。

というのも、この個所の最後にはイエスと十二弟子だけになってしまうからです。イエスはどこに行かれたのでしょうか。宮へ、血の生贄が捧げられる場所へと行かれました。11節を見てください。「11 こうしてイエスはエルサレムに着き、宮に入られた。そして、すべてを見て回った後、すでに夕方になっていたので、十二人と一緒にベタニアに出て行かれた。」この詳細を記した福音書の著者はマルコだけです。他の福音書の著者たちは、間違えなくエルサレムへ勝利の凱旋としてエルサレムに行かれたことを記しています。福音書の著者であるマタイはマタイの福音書21:10で「こうしてイエスがエルサレムに入られると、都中が大騒ぎになり、「この人はだれなのか」と言った。」と記しています。またルカはイエスの町に入られたことは町全体が騒然とするほどの大事件であったと語っています。ルカは従って来た人々の叫び声について記していますが、それは非常に大きなものだったことがルカの福音書19:39-40から分かります。「するとパリサイ人のうちの何人かが、群衆の中からイエスに向かって、「先生、あなたの弟子たちを叱ってください」と言った。40 イエスは答えられた。「わたしは、あなたがたに言います。もしこの人たちが黙れば、石が叫びます。」」ですが、これはマルコが私たちに示してくれた場面とは異なります。彼は人々がすぐに立ち去り、イエスが一人になられたことを知ってほしかったのです。イエスは宮に入りましたが、これは二つの意味で重要です。一つ目は来週見るように、神が、イエスご自身が賛美される場所、またイエスご自身の犠牲が動物の生贄という形で何度も何度も描かれる場所であるはずの宮が、真の礼拝のない場所となっていたことです。そして二つ目は、宮で捧げられる生贄が表していた贖いを、自らの肉体と血をもって果たすことがイエスの目的であったことです。ですが、イエスは宮にとどまることはありませんでした。そこはイエスがメシアとして見出される場所ではなかったのです。イエスは成就するために来たすべてを象徴する、イスラエルの信仰の中心となる場所へ、誰からも認められずただ一人行かれるのです。去っていた群衆と同じく、人々はイエスを拒絶しました。自分たちの真のメシアを、預言を成就されたお方を、宮で教えられ示された方を認めるのではなく、イスラエルの民は宮の指導者たちの周りに集まり、「十字架につけろ」と叫んだのです。そして、その個所にたどり着くまでおそらくあと何度か指摘することになるかと思いますが、十字架にかけられた男を見てマルコの福音書15:39にあるように「この方は本当に神の子であった。」と言ってイエスが神であることを認めたのは、ユダヤ人ではなくローマの兵士でした。

私たちはこの出来事から何を学ぶことができるのでしょうか。私たちは「ホサナ」「主の御何よって来られる方に祝福あれ」といった人々の叫びに注目しがちです。これらの言葉から実際に多く

の歌が作られました。多くの教会で、過去にはこの教会でも、棕櫚の日曜日には棕櫚の葉を振ってこの出来事を覚えていました。ですがイエスは賛美の大きな叫び声には興味がありませんでした。人々はすぐに他のことに移っていき、先ほどの私の発言はともかく、多くの人々が数日後にはイエスを拒絶することになりました。イエスが求めておられたのは、特別な人として目立つことはなくとも、イエスに従って子ろばを連れてきて、群衆が去った後もイエスと共におり、数時間前に華々しく入ってきた町を出て、ベタニヤまでの3キロほどの道のりを静かにイエスに従っていく人たちでした。教会に来て手を上げて歌を歌い、毎年この出来事を祝う日曜日に棕櫚の葉を振ることもあるかもしれませんが、ひとたびこの建物を去ると賛美したお方に従わないことがどれほど簡単なことか。ホサナ「私たちを救ってください」と叫ぶ群衆の一員であっても、その救いを与えてくださるキリストの栄光の十字架に目を向けずに1週間過ごすことが何と簡単なことか。「天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。御国が来ますように。みこころが行われますように。」と声を合わせて祈ることを喜ばしく思っても、日々この世で生きる自分自身のためにそのように祈れずにいることか。弟子であること、イエス・キリストに従うことなしに真の礼拝はありません。そして、イエスに従うすべての人にとって、棕櫚の葉を手に取り、イエスに従った他の人たちと共に、ヨハネの黙示録7:9-10に「すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち、白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていた。10 彼らは大声で叫んだ。「救いは、御座に着いておられる私たちの神と、子羊にある。）」と描かれている者たちの一人となる日が来ます。ですが、イエスに従わないものに対して、イエスは再び来られますが、その時は平和な子ろばに乗ってではなく、ヨハネの黙示録が19:11には「¹¹ また私は、天が開かれているのを見た。すると見よ、白い馬がいた。それに乗っている方は「確かで真実な方」と呼ばれ、義をもってさばき、戦いをされる。」とあります。そして16節には「その衣と、もものところには、「王の王、主の主」という名が記されていた。」とあります。この方が、私たちがその再臨を待ちのぞみ、その時まで私たちが従うイエスです。お祈りします。

Mark 11:1-11 The beginning of the End

Today is significant in our study in the book of Mark. Today is the beginning of the account of the last week of Jesus life. Of course when you look at the book of Mark, you notice that we are only 2/3rds of the way through the book! There are still 6 chapters left. Mark may have added some events that take place at different times into this final week, but this type of length matches what we saw when we worked our way through John way back in 2017 and 2018 where nearly half of the gospel of John is covering the last week of Jesus's life. Specifically, today, we are looking at the event that opens up the final week of Jesus's life which is the entry in Jerusalem found in Mark 11:1-11. We know it as the triumphal entry or Palm Sunday by tradition. And this event is all about fulfilling prophecy and drawing clear attention to the fact that Jesus is the Messiah who fulfilled the Old Testament prophecies. There is practical truth for us in this event as well, but it can only be seen at the end after the event is complete, so let's begin by reading Mark 11 starting with verse 1 and I will read through verse 6. **As they approached Jerusalem and came to Bethphage and Bethany at the Mount of Olives, Jesus sent two of his disciples,² saying to them, "Go to the village ahead of you, and just as you enter it, you will find a colt tied there, which no one has ever ridden. Untie it and bring it here. ³ If anyone asks you, 'Why are you doing this?' say, 'The Lord needs it and will send it back here shortly.'" ⁴ They went and found a colt outside in the street, tied at a doorway. As they untied it,⁵ some people standing there asked, "What are you doing, untying that colt?" ⁶ They answered as Jesus had told them to, and the people let them go.**

The very first sign that we have that there is going to be some prophetic fulfillment taking place is the mention of the Mount of Olives in verse 1. The Mount of Olives was always associated from Old Testament times with the coming of the Messiah, so it is significant that Mark mentions it here. And it is the fulfillment of Messianic prophecies that is at the center of what is happening here. It may not be clear at first, but it is the reason why so much attention is put on this colt. We find out in the book of Matthew that it is a Donkey's and many people of course just know Jesus rode a donkey. Now we normally think about the triumphal entry and Palm Sunday primarily just as entering into Jerusalem on a colt. But the gospel writer here Mark under the inspiration of the Holy Spirit spends far more verses describing getting a donkey's colt than the actual entry into Jerusalem itself. That's because the donkey is crucial to our understanding why this event is important. In order to see why, we need to go to the Old Testament book of Zechariah, chapter 9. This passage is key to understanding the detail put into the acquiring of this colt. In Zechariah 9, God speaks through the prophet Zechariah and begins the chapter by prophesying the conquest of Alexander the Great, king of the Macedonians. Alexander would eventually overthrow the Persian king, Darius, and with that end the Persian empire in 334BC. And as part of that conquering of the Persian Empire, God's judgement would come against a list of cities and people groups that had come against the people of God. Included in the list of those facing destruction by Alexander's armies were Tyre and Sidon, Ashkelon, Gaza, Ekron and the Philistines. But the main point that God prophecies through Zechariah comes in verse 8, where God promises that rather than destruction, Jerusalem would be spared from the oncoming armies. God speaking in Zechariah 9:8 says,⁸ **Then I will encamp at my house as a guard, so that none shall march to and fro; no oppressor shall again march over them, for now I see with my own eyes.** This event is not recounted for us in the Bible, but Jewish historical sources say that Alexander and his armies show up to Jerusalem and

rather than marching against it and destroying it, they leave it alone due to a dream that God gave to Alexander. Is that true, maybe so or maybe not...but either way Jerusalem was spared as God prophesied. Then based on that prophecy, we move into verse 9, the direct connection to Mark 11, and I want us to read [Zechariah 9:9-11](#). [Rejoice greatly, O daughter of Zion! Shout aloud, O daughter of Jerusalem! Behold, your king is coming to you; righteous and having salvation is he, humble and mounted on a donkey, on a colt, the foal of a donkey. 10 I will cut off the chariot from Ephraim and the war horse from Jerusalem; and the battle bow shall be cut off, and he shall speak peace to the nations; his rule shall be from sea to sea, and from the River to the ends of the earth. 11 As for you also, because of the blood of my covenant with you, I will set your prisoners free from the waterless pit.](#)

So, now tied to the salvation of God's people, Israel in the case here in Zechariah, Zechariah prophecies that there is a true king coming, who rather than destroying them as Alexander could have, will bring salvation. The understanding is that this savior is the one who saved them from destruction, but the extent of this king and Savior's influence is far greater than the people of Israel. The entire earth comes under his control, and yet he enters the city of Jerusalem riding on a young donkey. This event then would mark the entrance of the king. But then notice verse 11, because it is important to include it in this prophecy. The salvation that is offered comes because of a covenant sealed with blood. Even in the prophecy of a king, a Messiah who rides in on a donkey to Jerusalem, there is a connection to the sacrificial shedding of blood that leads to freedom and salvation. So the kingdom that the Messiah brings will extend over the whole earth, but not without blood being shed to make that kingdom and the salvation it brings possible. The Jewish people recognized that this scripture in Zechariah was prophetic and was talking about the Messiah. It is likely that the people gathered to welcome Jesus into the city had this picture in their minds. But they were not connecting it to the sacrifice that would make his kingdom possible, even though he has prophesied it clearly and the Old Testament itself was clear in its requirement of shed blood. The writer of the New Testament book of Hebrews recognized this when he wrote in [Hebrews 9:22](#) [Indeed, under the law almost everything is purified with blood, and without the shedding of blood there is no forgiveness of sins.](#) And it is not just the passage in Zechariah that makes this connection between sacrifice and the Messiah and a donkey colt. Another significant Messianic passage is Genesis 49. This is speaking about Judah, the 4th born son of Jacob, who would be the direct ancestor of king David and therefore Jesus Christ as well. [Genesis 49:10-11](#) [says, The scepter shall not depart from Judah, nor the ruler's staff from between his feet until tribute comes to him; and to him shall be the obedience of the peoples. 11 Binding his foal to the vine and his donkey's colt to the choice vine, he has washed his garments in wine and his vesture in the blood of grapes.](#) So, once again there is a king from Judah's line connected with a donkey's colt and washing or purifying by blood. Of course this is poetic prophetic language, but the connection cannot be a coincidence.

There is no salvation without the sacrifice of the Savior, which has been connected by prophecy from the earliest point in the Old Testament with a king coming on a donkey's colt. So Jesus getting this colt in fulfillment of the prophecy in Zechariah and Genesis as well is highly significant to show that he is that Savior, their Messiah. And what we see as Jesus now rides on this colt shows exactly what is described in Zechariah. Let's read verses 7-10. [7 When they brought the colt to Jesus and threw their cloaks over it, he](#)

sat on it. **8** Many people spread their cloaks on the road, while others spread branches they had cut in the fields. **9** Those who went ahead and those who followed shouted, “Hosanna!” “Blessed is he who comes in the name of the Lord!” **10** “Blessed is the coming kingdom of our father David!” “Hosanna in the highest heaven!” The crowds who had followed Jesus now accompanied and welcomed him into the city of Jerusalem with what can only be described as words of praise that recognized Jesus as the Messiah. While most of the time we just think of the word Hosanna as some sort of shout of praise, the word, “hosanna” is much more specific. The word “Hosanna” is from a Hebrew word which means literally, “Please save us or deliver us!” They were recognizing in Jesus an ability to save them, although as will become clear, they do not connect that salvation with sacrifice. Their words even come from a Messianic portion of [Psalm 118:25-27](#) where we see the words that form the basis of Hosanna as [Psalm 118:25](#) begins [Save us, we pray, O Lord! O Lord, we pray, give us success!](#)²⁶ [Blessed is he who comes in the name of the Lord! We bless you from the house of the Lord. The Lord is God, and he has made his light to shine upon us...](#)

So what is immediately clear in this event is that the crowds were looking for a Messiah, and they recognized Jesus as that Messiah. So what went wrong? How does this event match with what happens a week later as he is nailed to a cross? It should be noted first, that the crowds gathering to welcome Jesus, are not necessarily the same crowds yelling crucify him a week later. Those details are not clear from Scripture, and although there seems to be a natural tendency to equate the crowds here with the crowds yelling, “crucify him,” they are not necessarily the same. While recognizing this fact, there is a clue as this passage draws to a close that may show how crowds could be this fickle. Immediately what happens shows that while Jesus is clear in his fulfillment of prophecy as the Messiah, he would publicly deny being the type of Messiah that the crowds had misunderstood him to be. The crowds saw the colt he rode and recognized the Messiah, but they missed the Old Testament connection of that colt to a blood sacrifice. But that is what is central to who Jesus is as the Messiah, not riding a colt and entering Jerusalem as a king. And the crowds seem to immediately melt away, and continue to leave as they realize Jesus did not come into the city to proclaim a revolution against Rome.

I say this because as this passage ends Jesus is left alone with the 12 disciples. And where does he go? To the temple, to the place where the blood sacrifices are offered. Look at verse 11. **11** [Jesus entered Jerusalem and went into the temple courts. He looked around at everything, but since it was already late, he went out to Bethany with the Twelve.](#) Mark is the only gospel writer to give us this detail. The other gospel writers that tell us of the triumphal entry into Jerusalem definitely paint a picture of triumph in the entry into the city. The gospel writer Matthew tells us in [Matthew 21:10](#), [And when he entered Jerusalem, the whole city was stirred up, saying, “Who is this?”](#) And Luke tells us that Jesus’s entry into the city was such a huge event that the entire city seemed to be in an uproar. Luke talks about the same shouts from the crowd of followers and it was so loud that we read in [Luke 19:39-40](#) ...³⁹ [And some of the Pharisees in the crowd said to him, “Teacher, rebuke your disciples.”](#) ⁴⁰ [He answered, “I tell you, if these were silent, the very stones would cry out.”](#) But this is not the scene that Mark is painting for us. He wants us to see that these crowds quickly leave and Jesus is alone. He goes into the temple, which is important for two reasons. One as we will see next week, the temple that was supposed to be a place where God, where really

he (Jesus) was worshipped, and where his own sacrifice was pictured over and over by animal sacrifice, had been emptied of true worship. And two, his purpose was to fulfill with his own body and blood the redemption that those sacrifices made in that temple pictured. But, he did not stay there in the temple. This is not where he would be found as their Messiah. He goes unrecognized and alone to the place that stands at the center of Israel's faith, the place that represented everything he came to fulfill. But just like the crowds who left, his own people rejected him. And rather than recognizing their true Messiah, the one they saw fulfill prophecy, the one who had been taught about and pictured in the temple, the people of Israel would rally around the leaders from that temple yelling "crucify him." And as I will point out possibly several more times before we get to that place, it would not be a Jew, but a Roman soldier who sees the man on the cross and in [Mark 15:39](#) recognizes that... "Truly this man was the Son of God!"

So what can we learn from this event? We usually focus on the shouts of "hosanna" and "blessed is he who comes in the name of the Lord." We write songs from these words – lots of them in fact! In many churches, even here sometimes in the past, on Palm Sunday, we wave palm branches to remember this event of the triumphal entry. But Jesus wasn't interested in the loud shouts of praise. Those people quickly moved on to other things and my earlier remarks notwithstanding, many would reject him days later. He wanted the followers who may not stand out as exceptional men, but who obeyed him by getting the colt, who stayed with him when the crowds were gone, and now quietly followed him the 3 kilometers to Bethany after leaving the city they had gloriously entered a few hours before. It's easy to come to church, to raise your hands and sing songs, perhaps even wave palm branches each year on the Sunday we celebrate this event, but then leave the building and fail to follow the one we claim to worship. It's easy to be a part of a crowd declaring Hosanna, "save us" but not go through our week with our eyes focused on the glorious cross of Christ that provides that salvation. It feels good to quote in unison, "Our father in Heaven, hallowed be your name, your kingdom come, your will be done..." but then fail to pray that each day for our own lives that we live in this world. There is no true worship apart from being a disciple, apart from being a follower of Jesus Christ. And for all who follow Jesus, there is coming a day where we will stand with all those who have followed him with palm branches in our hands and according to [Revelation 7:9-10](#) be part of... "a great multitude that no one could number, from every nation, from all tribes and peoples and languages, standing before the throne and before the Lamb, clothed in white robes, with palm branches in their hands,"¹⁰ and crying out with a loud voice, "Salvation belongs to our God who sits on the throne, and to the Lamb!" But for those who do not follow him, Jesus is coming again, and this time, it is not on the peaceful colt, but as [Revelation 19:11](#) describes,¹¹ "Then I saw heaven opened, and behold, a white horse! The one sitting on it is called Faithful and True, and in righteousness he judges and makes war...then in verse 16... On his robe and on his thigh he has a name written, King of kings and Lord of lords. This is Jesus, who we follow while we wait for his return. Let's pray.